慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロールシャッハ・テストにおける色彩刺激の効果に関する研究
Sub Title	Effects of color stimuli on Rorschach test
Author	本井, 久美子(Motoi, Kumiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1972
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.12 (1972.) ,p.63- 75
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000012-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ロールシャッハ•テストにおける色彩刺激の効果に関する研究

Effects of Color Stimuli on Rorschach Test.

本井　久美子
Kumiko Motoi

I. 目　　的

古来色彩というものが情緒性と大きな関わりを持っているということは，広く云われてきたことであるが，ロールシャッハ・テストにおいても色彩因子は情緒面の反映であると考えられている。殊に色彩ショック現象は情緒的に抑圧された被験者に多くみられると，Rorschach 自身も述べている。実際にこの色彩ショック現象の存在を肯定する立場の研究者も多く存在するが一方では否定的な立場の研究者も多い。即ち色彩カードでショック現象が存在したからと云って，それが色彩そのものの効果であるとは云いきれない問題がある。ロールシャッハ・テストの刺激属性が多様性を有しているので色彩だけの効果を取り上げにくいのである。この色彩ショック現象に関する疑惑は色彩効果に関する実験的な研究が相反する結果を示しているために一層強められることとなった。

色彩反応に関する実験的研究は大きく三つに分類することが出きる。

[1] 正常者を対象とした研究……Lazarus (1948) は高校生 100 名を対象として原図版と無彩色シリーズのテスト・リテスト法式で実験を行い，色彩に関する解釈仮説は支持できないという結果を導いている。一方 Siipola (1950) は原図版の有彩色部位を20に分割してそれに対応する無彩色刺激を作製して二群に分けた正常な被験者にいずれか一方を用いてテストを行い，反応時間の遅延，情動的態度の増強などの結果を導き，色彩が情緒的変動を招来するという仮説を確認した。このように相反する結果を出した両者は，互いの方法で実験を行ったが同じように Lazarus は否定的，Siipola は肯定的結果に終わった。その他正常者の色彩反応に関する研究は，Allen (1951), Dubrovner (1950), Baughman (1954), Mayer (1951) らによって行われたがいずれも色彩の効果については否定的な結果を報告している。

[2] 精神疾患者を対象とした研究……Crumpton(1956) は原図版と無彩色シリーズを用いて精神病，神経症，脳疾患の病者30名にテストを施行して，色彩の存在が反応内容に影響し，攻撃性，不快感情を増大させるという結果を報告している。また York (1951) Brody (1953), らも精神疾患者を対象としたテストを行って，いずれも色彩が動揺を生じやすくするのに重要な因子であると結論している。

[3] 特殊な実験条件の研究……Siipola (1952) は正常な被験者に時間的圧力をかけて緊張状態をつくり出してテストを行い，圧力をかけたグループ程不確定反応が増大したと報告している。Hafner (1958) は，Siipola と同じ条件の下で行い，圧力をかけられたグループはコントロール喪失の方向に行くと述べている。

以上のことから正常者についての研究では Siipola 以外はいずれも色彩の効果について，否定的な結果を得ているが，神経症患者や実験的に緊張状態にされた被験者はいずれの結果でも少からず色彩の影響を受けている。従って通常より不安感の強い精神状態におかれた場合，色彩の影響が明瞭に現われて，より鮮明な変化が示されると思われる。本実験はこのような観点に基づいてロールシャッハ・テストにおける色彩刺激の効果を調べるこ

とを目的とし，そのために新たに色彩を加えるという方法を取った。従来の研究は刺激を標準刺激と無彩色刺激というようにマイナスの方向へ変化させているが，本研究は標準刺激と有彩色刺激（全部有彩色カード）というようにプラスの方向へ変化させて，色彩を増加させた場合の効果を検討しようという意図のもとに計画したものである。おな，この研究は昭和44年度慶応義塾大学社会学研究科修士論文として提出したもので医学部の馬場礼子氏に御指導いただいたものである。

II. 方　　法

1. 刺　激

二種類の刺激を用意した。即ち一般に用いる標準シリーズ（以下Sシリーズ。色彩カード5枚，無彩色カード5枚）と有彩色リシーズ（以下Cシリーズ）の二種類である。有彩色シリーズの作製にあたっては次のようなことを考慮した。①無彩色カード5枚の中で色分けが可能なものと不可能なものに分け，I. IV. V. カードでは図版の印象を破壊せずに分割することはできないので，単色とすることにした。②色彩を決定する場合に図版の持つ印象，役割などを考慮して，I カードの場合などは1枚目であまり刺激的ではいけないということからピンクなどの色を避けブルーとした。③新しく着色する色は，今までのロールシャッハテストに関する色彩研究から連続的に行われるように，すでに有彩色のカードの中で用いられている色から選んだ。④実際に作るにあたって印刷ということは不可能であったので，手描きで作製し，しかも既にある5枚の有色彩カードと組み合わせて用いるためちぐはぐな印象を与えないように，紙の厚さ，表面の光り方などをできるだけ似せるようにしてある。5人の者に予備テストを行って一連のセットとして不自然ではないということを確認した。以上の点に留意して5枚の彩色カードを作製した。

Ⅰ　カード　全体を青色にしてある。
Ⅳ　カード　全体を緑色にしてある。
Ⅴ　カード　全体を赤紫色にしてある。
Ⅵ　カード　縦に三色に色分けをして外側から青・黄・赤の順になっている。
Ⅶ　カード　縦に並んだ三つのD領域に上から緑・黄・赤の色をつけてある。

（なお，各カード共にできるだけ原図版の濃淡を忠実に描くようにしてある。）

2. 被 験 者

初めに述べたように色彩刺激の効果を検討するには神経症者の場合に，より顕著に変化があらわれるということであったが，病者では病気の要因が入って来てしまって神経症の程度，質が新しい要因として働き複雑となりすぎる。従って正常者の中で高不安群と低不安群というグループを設けることとした。

すべて大学生で広義の正常，社会適応者。年令は18歳から30歳。予備テストを行って二群に分けた。

低不安群 (Low Anxiety Group. 以下LA群)……正常者の代表として顕在性不安検査 (MAS) の得点が 22点以下で，しかも矢田部・ギルフォード性格検査(Y-G)でD型（積極的適応型）C型（消極的適応型）に属する者のみを採用した。

高不安群 (High Anxiety Group. 以下 H. A. 群)……神経症的緊張状態に比較的近い正常者ということで選択した。この群は MAS で 23 点以上を示した者を Y-G テストの結果にかからず，すべて採用した。

3. 手　続

予備検査：被験者を選択するために，Y-G と MAS を 144 名の大学生に施行し，前記の条件に合わせて L. A. 群と H. A. 群とに分類した。その結果，L. A. 群は男子 13 名女子 25 名合計 28名，H. A. 群は男子 9 名女子 19名合計 28 名となった。

本検査：予備検査によって分けられた H. A. 群と L. A. 群を夫々2群に分け Sシリーズと Cシリーズのいずれか一方を施行する。ロールシャッハ・テストは片口式に従って個人法で行った。結果の整理方法は各群とも共通でやはり片口式整理法に従っている。

III. 結 果 と 考 察

1. 全体的結果と考察

[Table 1：各カテゴリーについての4群の比較]

各カテゴリーを4群間で比較したものでR項以下は平均値である。この表では副分類は決定因，反応内容のいずれにも含めていない。又ここで扱った H% は H, Hd, (H)(Hd) を合計した値である。統計的有意差は H. A. 群内でSシリーズ群と C シリーズ群との間に FM と H% に関してみられた。

色彩刺激が与える心理的変化から予想されることとしては次のようなことが考えられる。すなわち感情，情緒面に働きかけ，外在的刺激である色彩を強化することによって，対外的反応性を刺激することになり，具体的には論理的客観的判断力の低下，知的統合力の低下，内的精神活動の低下，個人的感情を反映する反応表象の増加などとなって現われる。したがってロールシャッハ反応

Table 1.　各カテゴリーについての4群の比較

	L. A.		H. A.	
	S	C	S	C
Ss	19	19	14	14
male	7	6	4	5
female	12	13	10	9
R	34.7	32.6	33.6	33.2
T/R1 (Aver)	24.5	17.1	26.7	17.7
T/R1 (Chrom)	27.8	18.7	28.7	16.6
T/R1 (Achrom)	21.4	15.7	24.9	18.7
W	21.2	20.1	19.2	22.4
W%	67.4	65.8	58.6	61.4
D	10.1	9.1	11.9	14.1
D%	25.1	25.5	28.9	30.6
d	0.8	0.9	1.1	0.5
d%	2.0	1.7	2.3	1.4
Dm	2.6	2.5	4.2	2.8
Dm%	5.6	6.5	10.9	6.6
M	7.3	5.7	7.0	6.4
FM	4.7	3.6	2.5	6.5
m	0.9	0.6	0.9	1.1
F%	34.4	37.7	40.0	38.1
ΣC	5.6	7.2	5.8	6.9
H%	25.9	23.7	28.8	19.2
A%	45.1	43.6	38.6	45.9
At%	2.0	3.8	1.7	3.7
Fire%	2.2	3.4	3.1	1.8
Expl%	1.8	0.8	1.6	0.8
Lds%	4.4	2.9	3.2	5.0
Pl%	6.7	8.2	9.1	6.8
Bl%	0.7	0.1	0.8	0.6
P	5.5	4.8	5.0	4.8
C. R.	9.6	8.8	9.4	9.7

においては pure F の減少，形態質の低下，平凡反応の減少，W＋ の減少，M の減少などが起こると予想される。これらの点を Table 1. から検討してみると，反応数Rに関してはほとんど差はない。仮説に従えばCシリーズ群では色彩の増加から情緒的昏迷或いは統覚的困難が生じてRが減少するはずであるがこの結果には現れていない。初発反応時間 T/R1 に関しては，平均値では H. A. 群と L. A. 群ともにSシリーズ群とCシリーズ群に差があるが個人差が大きいために統計的有意差はみられない。但しCシリーズ群では従来の色彩図版（Ⅱ. Ⅲ. Ⅷ. Ⅸ. Ⅹ）での T/R1 がSシリーズ群より早くなっている。ここで考えられることは10枚のカード全部に色彩があるCシリーズ群では色彩の与える情緒的変動が汎化するために当該図版での色彩の出現がSシリーズ程ショックを与えないのではないかということである。

反応領域では W＋% がSシリーズ群よりCシリーズ群で，又同じCシリーズ群でも L. A. 群より H. A. 群で減少している。これは外的刺激（色彩）が増大しているために知的統制に混乱が生じるためと考えられる。d% と Dm% では H. A. 群で Sシリーズ群よりCシリーズ群に減少がみられ，これは色彩刺激の増加によって対象を細かく分析し検討する機能が低下したと考えてもよいのではないか。一方 L. A. 群では差がないので，H. A. 群は色彩によって動揺が生じやすいと云える。

決定因ではMが L. A. 群，H. A. 群ともSシリーズ群よりCシリーズ群で減少している。Mは想像性，心理的共感などの内面的活動性および知的観念的活動の活発さを反映させるものである。このMが減少するということは色彩という外的刺激が強いために知的及び内面的活動性が妨害されたと考えられる。FM は H. A. 群でCシリーズ群に著しい増加がみられる。これはMの減少を解決するために，より低次元な願望空想の開放が CF にならず，FM となるところに一つの防衛過程の介入があり直接的な感情の表現でなく空想化，観念化を通しての開放を増大させているところに正常範囲の H. A. 群の特色があるのではないか。また黒白を軽快な色に変えたために，彩色による客観的刺激特性の変化によるとも考えられる。ΣC は両群ともCシリーズ群で増加しているのは当然のことである。

反応内容では H% が H. A. 群でCシリーズ群において著しく減少している。A% は L. A. 群ではCシリーズ群で減少し，H. A. 群では増加している。A% は常識的で客観的判断力を意味するものであるから H. A. 群では減少するはずであり，一見矛盾した現象であるが正常範囲内の高不安者ではCシリーズでむしろ不安に対する防衛が強化され A% が高まったものではないかと考えられる。At% は両群ともCシリーズ群の方が多い。これは色分けしてある部分に対して〝教科書などにのっている解剖図〟という反応をする場合が増加したためである。出現頻度の低いカテゴリーであるし L. A. 群と H. A. 群に差はないが一般に不安感(殊に自身の身体に関する）を反映すると仮説されている At 反応がCシリーズ群で増大していることに関しては何らかの情緒的意味が

あるのかもしれない。Expl% は両群ともCシリーズ群で減少している。これはほとんどIXカードで与えられるもので，このカードは従来色彩ショックを受けやすいカードの一つとされていた。従ってCシリーズではすべて色彩があるためIXカードの出現があまり衝激を与えず，そのため不安を示唆する爆発反応の出現度が低下したと云えるのではないだろうか。Bl % がCシリーズ群で減少したのも Expl% と同様である。

平凡反応に関しては彩色したカードのうちPのあるものが I. IV. V. VII であるが，そのうち I. IV. V は単色であるのでP反応に影響なく VII は多彩で領域が分割されており，原色であるのでPが著しく減少している。VII 程度に色を用いれば D. A. P. 式の平凡反応認知を崩す刺激となるであろう。

Table 2.　∑C-M について4群の比較

	L. A.		H, A,	
	S	C	S	C
∑C−M	−1.64	1.54	0.66	0.80
∑C>M	10	11	7	11
∑C=M	1	1	0	1
∑C<M	8	7	7	2

注意：　上一段は差の平均値
　　下三段は人数

[Table 2.　ΣC−M について4群の比較]

前項で ΣC がCシリーズ群で増加しているのは当然のことであると述べたが，その ΣC と M との相関という形で色彩への反応性を検討したものが Table 2. である。H.A. 群において，ΣC>M の者がSシリーズ群よりCシリーズ群の方で増大しているということはこの群の被験者が色彩の影響を受けやすいということを示すものであろう。

以上が10枚のカード全体の反応を群別に整理検討したものである。

2.　カード別結果と考察

Table 3-1.　I　Card

	L. A.		H. A.	
	S	C	S	C
Ss	19	19	14	14
R	57	51	45	42
T/R1	21.2	15.4	20.4	11.6
W	79	71	73	79
D	18	29	18	14
d	0	0	0	0
Dm	4	0	9	7
M	24	24	22	16
FM	7	12	2	12
m	1	0	2	5
k	3	0	0	0
K	1	3	0	0
FK	4	5	0	2
F	61	56	60	63
Fc	2	1	9	0
c	0	0	0	0
C′	9	1	11	2
FC		0		0
CF		2		0
C		3		4

注意：　T/R1 は平均値

Table 3-2.　IV　Card

	L. A.		H. A.	
	S	C	S	C
Rs	19	19	14	14
R	67	61	48	42
T/R1	29.5	19.5	24.9	24.4
W	75	70	58	74
D	15	20	21	19
d	4	7	8	0
Dm	6	3	13	7
M	26	15	27	24
FM	16	10	9	10
m	4	2	0	1
k	0	0	0	0
K	3	0	3	0
FK	10	10	5	7
F	37	45	50	36
Fc	12	13	18	22
c	1	2	0	3
C′	6	0	4	0
FC		11		11
CF		2		0
C		0		0

Table 3-3. V Card

	L. A.		H. A.	
	S	C	S	C
Ss	19	19	14	14
R	50	51	34	44
T/R1	11.5	9.3	32.3	14.2
W	64	88	68	70
D	12	6	12	14
d	12	2	9	14
Dm	12	4	12	2
M	7	9	16	7
FM	20	24	18	34
m	4	2	0	0
k	0	0	0	0
K	0	1	0	2
FK	0	4	3	0
F	64	51	58	55
Fc	2	5	3	1
c	0	0	0	0
C′	9	0	10	0
FC		11		1
CF		4		2
C		0		0

Table 3-4. VI Card

	L. A.		H. A.	
	S	C	S	C
Ss	19	19	14	14
R	70	57	51	59
T/R1	28.7	15.2	36.7	18.4
W	73	77	54	64
D	19	16	23	19
d	3	4	6	3
Dm	6	4	15	14
M	18	6	8	8
FM	3	9	2	7
m	6	2	6	5
k	0	0	0	0
K	1	3	1	2
FK	9	4	3	4
F	46	33	61	42
Fc	23	4	22	6
c	3	0	0	0
C′	1	0	4	0
FC		18		17
CF		29		17
C		4		1

Cシリーズで新たに色彩を加えたカードに関して，各カード別に結果を整理してSシリーズ群とCシリーズ群の比較を試みた。

[Table 3. カード別の各カテゴリー群についての4群の比較]

各カテゴリー別各群毎の数値を群内の総反応数に対するパーセント値で表わしたものである。副分類には $\frac{1}{2}$ のウエイトをかけて計算した。

[Table 4. カード別 ((Cシリーズ群－Sシリーズ群)) の値 (%)]

Table 3. における値を用いてCシリー群とSシリーズ群との差を求めて5枚のカードで同時に比較できるようにしてある。

[Table 5. 反応内容の4群間の比較]

各反応内容について各群の被験者の中でどの程度の頻度を持って出現するかを示している。

I カード…… C シリーズの方では全体の印象が軽くなっているので反応内容に影響して暗く恐しいものという内容が減少し，色彩は地味なものなので色彩反応は特に増大せず，一方陰影は原図版より減少しているのでΣC は減少するなどということが予想される。Table 4. の結果から考察するとWとDでH. A. 群とL. A. 群が逆方向に大きく変化している。これは前者が色彩刺激の影響を受けて細分化の機能が低下したためであろう。FM の増加は黒白から軽快な青白へと刺激が変化したためと思われる。同じ現象がV カードでも認められI・V・カード程度の色付けでは運動反応を低下させるような刺激とはならずにむしろブロットの印象を軽くし明るさを変え情緒的反応性を高めるので単純で次元の低い運動反応 (FM) を誘発する刺激となったと考えられる。Σc・FC に関しては予想通りである。Table 5. から反応内容を考察すると，まず〝こうもり〟などのP反応が減少しない。W の〝鬼の面〟が有彩色シリーズで増加するのは濃淡の減少と共に動物らしさが減少するためである。Wの人間反応はこわいという印象が減っている。X-ray はCシリーズ群では0であるので黒の刺激を受けやすい

Table 3-5. VII Card

	L. A.		H. A.	
	S	C	S	C
Ss	19	19	14	14
R	53	48	44	58
T/R1	28.8	25.5	17.0	27.1
W	62	69	59	60
D	26	19	23	34
d	0	2	7	2
Dm	11	10	11	3
M	23	28	43	16
FM	13	4	5	7
m	6	3	2	2
k	0	0	0	0
K	4	0	0	2
FK	0	3	2	1
F	45	29	36	37
Fc	11	6	9	2
c	0	1	0	0
C′	2	0	2	0
FC		9		11
CF		22		25
C		5		6

表象であると思われる。直接色彩を反映させる内容としては〝海〟〝プール〟などがある。

Ⅳ カード…… 色彩カードの方では軽快で明るい雰囲気の増加，陰影が原図版より強いため Σc の増大，色は地味であるがⅠカードよりCが増大するであろう。明暗差が減少しているので抑うつ的感じを与える刺激性が弱くなり内容として抑うつ的，恐怖的なものが減少するであろうなどが考えられる。Table 4. からは，Mの減少，F の H. A. 群と L. A. 群との差が著しい，Σc の増大，FC の増大などがみられる。Mが減少したのは緑色のために〝大男〟とか〝悪魔〟の印象が薄くなるためであろう。FC は増大しているが CF+C の増加は少く色の影響は形態把握を保てる程度にしか及ばないのであろう。Table 5. からは，W の H, (H), (A) などの反応に恐怖像がCシリーズで減少している，緑色でも Pl は増さない，Wの〝動物の顔〟の反応がCシリーズ群で増加しているなどの特徴がみられる。〝動物の顔〟が増加したのはCよりcの影響と思われる。

Ⅴ カード…… 色への好みの個人差のため反応内容にばらつきが大きくなるであろう，陰影が原図版より強いので Σc が増大するであろう，などが予想される。実際の結果は Table 4. を見ると d に H. A. 群と L. A. 群とで大きな隔りがある，W が増加している，FMが増加

Table 4. カード別［有彩色シリーズ群—標準シリーズ群］の値（%）

Card No.	Ⅰ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ		Ⅶ	
Gr.	L. A.	H. A.	L. A.	H. A.	L. A.	H. A.	L. A.	H. A.	L. A.	H. A.
R	− 6	− 3	− 6	− 6	+ 1	+10	−13	+ 8	− 5	+14
T/R1 sec	− 5.8	− 8.8	−10.0	− 0.5	− 2.2	−18.1	−13.5	−18.3	− 3.3	+10.1
W	− 8	+ 6	− 5	− 2	+24	+ 3	− 4	+ 9	+ 7	+ 1
D	+11	− 4	+ 5	− 2	− 6	+ 2	− 3	− 5	− 7	+11
d	0	0	+ 3	− 8	−10	+ 5	+ 1	− 3	+ 2	− 5
dm	− 4	− 3	− 3	− 6	− 8	−10	− 2	− 2	− 1	− 8
M	0	− 6	−11	− 3	+ 2	− 9	−12	0	+ 5	−27
FM	+ 5	+10	− 6	+ 1	+ 4	+16	+ 6	+ 5	− 9	+ 2
m	− 1	+ 3	− 2	+ 1	− 2	0	− 4	− 1	− 3	0
k	− 3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
FK	+ 1	+ 2	0	+ 2	+ 4	− 3	− 5	+ 1	+ 3	− 1
F	− 5	+ 3	+ 8	−14	−13	− 3	−13	−20	−16	+ 1
Fc	− 1	− 9	+ 1	+ 4	+ 3	− 2	−19	−18	− 5	− 7
cF	0	0	+ 1	+ 3	0	0	− 3	0	+ 1	0
FC	0	0	+11	+11	+11	+ 1	+18	+17	+ 9	+11
CF+C	+ 5	+ 4	+ 2	0	+ 4	+ 2	+33	+18	+27	+31
FC+CF+C	+ 5	+ 4	+13	+11	+15	+ 3	+51	+35	+36	+42

している。Fが減少してその分が L. A. 群では FC へ，H. A. 群では FM へ移行しているなどとなっている。一方反応内容は Table 5. からわかるようPに反応の増加。〝花〟の増加，激しい運動反応の増加がみられる。色を用いる反応としては〝夕焼け〟〝さつまいも〟〝噴火〟〝花〟などがある。

Ⅵ　カード……色彩の刺激が強く，三色が不調和であるので反応内容に色彩を反映させる表象が出現するであろう，ΣC が増大するであろう，陰影の減少が Σc を減少させるであろう，色による分割が dr の増大を招くであろうなどが予想される。Table 4. の結果からは次のようなことが言える。反応数については高不安群と低不

Table 5-1.　I　Card の反応内容の比較

			L. A.		H. A.	
Content		Location	S	C	S	C
		Ss. →	19	19	14	14
H　全体像としての人間	こわいもの	W or D_1	2	0	2	1
	こわくないもの	〃	4	9	7	3
	こわい H or (H)	D_2	0	0	0	0
	こわくない H or (H)	〃	6	2	3	3
A　こうもり	動物	W	4	3	7	3
ちょう　蛾		W	7	4	4	4
動物の顔		W	9	6	5	6
お面		W	2	1	4	2
	鬼	W	0	3	1	2
鳥		W	2	0	0	0
虫		W or D_1	4	4	1	1
動物		D_2 or D_2	2	8	4	4
Obj　かぶと		W	3	2	2	1
銅たく etc.		W	1	0	0	2
X-ray　レントゲン写真		W	2	0	0	0
その他			W (V) くまと人	W 宇宙船のカプセル	W (V) 岩と動物	W 人間の頭がい骨
			W (V) 岩と鳥	D_4 (V) わし	dr 絶壁と波	W (V) 大きな人間
			W (V) ライオンの置物	S 怪物の口	dd 女の人の頭	W 沼に写る森
			W (V) 正面から見た魚	W 海	W (V) きばのある顔	W 何かが落ちる
			W 鳥	W プール	W (V) 山と谷の景色	W 葉っぱ
			W (V) 仏像	W 指輪	W (V) 山の上の塔	W (V) ネコの顔
					ds カンボジア	W クモ
						W 切り開いたやもり

Table 5-2. IV Card の反応内容の比較

Content	Location	L. A. S	L. A. C	H. A. S	H. A. C
	Ss →	19	19	14	14
H 大男，悪魔	W	12	11	9	6
ベールをかぶった人 etc.	D_2	3	1	0	1
A こうもり，蝶…羽のあるもの	W	8	12	7	6
動物の頭，エビ	D_1	3	4	5	7
動物の顔	W	2	3	2	4
いか	D_1	0	2	1	1
魚 etc.（泳いでいるところ）	W	3	4	0	3
動物 吠えている犬 etc.	D_3	2	1	2	0
鳥の頭	d_2	2	0	2	0
ヘビの頭	d_2	1	1	1	0
Aobj 毛皮	W	5	3	0	1
At 開いてある標本	W	1	2	0	1
Obj シャンデリア 燭台	W	2	1	2	0
Pl 大木	W	2	1	1	1
はっぱ	W	0	1	1	2
花の断面	W	3	0	1	1
海藻	W	0	2	1	0
つる	d_2	1	1	0	0
L ds 水に写る木や山の景色	W	1	1	0	0
Arch お城 建物	W	2	0	0	0
Cl 雲 火 けむり	W	4	0	1	0
その他		D_1 柱にしばられたコック W かぶとと頭 D_3+d_2 うつぶせの人 d_1 いか dd 目 d_1 焼き鳥 d_1 ぜにあおい	W マント D_1 スツール D_2 くつの裏 dr 飛行機 W 生け花 d_2 リュウの尻尾 di 人の足	d_1 岩と蛾 S 彫刻の顔 d_1 ギリシャ時代の人 dr 人が沢山 W 毛皮の帽子 d_1 けいとうの花 dd 冠 dd バレリーナ dr 人と馬	WS (V) きつねの顔 dd 人が２人 W 犬と岩 dd キリスト d_2 さそりのしっぽ W 中国の王様 W お墓と逆さの人

安群で逆の変化が見られる。M が減少し FM が増大する，F が ΣC の増大のために減少する，Fc は濃淡の波が出るところを色で区切ったため濃淡が消失し減少する，色の印象が強烈なため ΣC が著しく増大するなどである。反応内容に関しては〝極彩色の楽器〟の増大，H の減少，D_9 領域の人間の減少が顕著である。

Ⅶ　カード……三原色で明瞭な分割がなされているためにFは減少し明るさ陽気さの反映される反応内容が増大するであろうと思われる。又統合性は欠如し濃淡は明瞭なので Σc は変化しないであろう。Table 4. の結果から云えることは，まず Fc が予想外に減少したことである。これは Ⅵ カードの場合と異ってブロットの濃淡

Table 5-3.　V　Card の反応内容の比較

		L. A.		H. L.	
Content	Location	S	C	S	C
	Ss →	19	19	14	14
H　人間の全身像（マントをつけた）	W or D_2	6	4	2	2
全身の人間	D_1	1	1	2	0
人間の横顔	D_3	5	0	1	0
人間の足	d_2	1	1	1	1
A　こうもり　鳥	W	13	16	10	12
蝶　蛾	W	8	8	0	6
鳥　けものの口　首　なめくじ	d_8, d_1	5	0	6	3
2匹の獣のぶつかり合い	W	1	2	0	2
うさぎのような動物	D_2	0	2	1	4
動物の足	d_2	1	0	1	1
Obj　仮面	W	2	1	0	2
Pl　花の断面図　花	W	1	4	0	1
Lds　山	W	4	0	1	1
その他		W 本州 W 上層 W 岩と波 D_2 なめくじ	W 弓矢 W ハンガー W きつねのえりまき W 火山の噴火 WS 帽子と頭 di おへそ d_5 犬の顔 S ライオン W さつまいも W 夕焼け雲	W ブーメラン S 顔 S 椅子と2人の人 W (>) 岩と海 W (V) 谷間とやぐら W 尻尾のない双頭の竜	D_1 顔 W 木の根と土 W いのししが沢山 d_1 岩の上の子供 d_5 岩の上の子供 W すべり台とけむり

Table 5-4. Card VI の反応内容の比較

Content	Location	L. A. S	L. A. C	H. A. S	H. A. C
	Ss →	19	19	14	14
H 人間の全身像	D_3 W	7	2	1	4
〃	D_3 (>)	5	1	2	2
顔 or 面	D_3	0	2	1	1
A ネコ (顔 or 全身)	D_1 or W	5	7	6	3
動物の顔	W	2	1	0	0
魚 エイ	W	2	1	2	0
かに	D_5	0	1	0	4
動物	D_3	3	1	0	1
〃	D_3 (>)	1	1	1	2
A obj 毛皮	W	5	7	4	3
Obj 弦楽器	W	3	7	4	11
モップ ガラガラ	W	3	0	1	3
うちわ	W	0	1	2	2
羽根つきの羽根	D_1	2	0	2	0
十字架	W	3	0	1	0
焼けた鉄	W	2	2	0	1
トーテムポール	D_4	1	0	0	1
ガラス器	W	2	0	0	1
Food アイスキャンデー 骨つき肉 魚	W	2	1	1	2
Pl 花	W	3	5	3	0
木	W	1	0	1	0
葉	W	0	0	3	0
Arch 戦車	D_3 (>)	2	0	2	1
light 照明 街灯	W	0	4	0	5
Lds 海 山 島(上から見たところ)	W	0	2	0	4
水に写る景色	W (>)	3	1	0	0
Expl 噴火 火山	W	1	2	0	0
噴水	W	0	1	0	0
その他		Wジェット機 Wシャンデリア Wガラスの置物 d_2アシカの顔 W抽象画(2) D_1羽のある動物 d_2昆虫の口 W岩と人間	Wボートのオール Wちょうちょ W夢の世界 Wむささび D_5きじの尻尾 W感謝祭の飾り	D_1動物の頭(2) d_5猿の顔 W煙を出して飛ぶもの D_2椅子の足 D_2体温計 d_5細胞 Wかぶと d_3岩と虫	Wバッタの顔 W皮膚の切り口 W解剖したカエル Wむささび W細胞分裂 Wふすま Wカメ d_5滝と人

Table 5-5. VII Card の反応内容の比較

Content	Location	L. A. S	L. A. C	H. A. S	H. A. C
	Ss →	19	19	14	14
H　人間の全身像　踊っている人	D_6, W	12	4	9	3
〃　〃	D_6 or W(V)	3	4	7	1
顔，頭	WS	4	4	2	1
人間の全身	W	0	1	0	0
A　動物　うさぎ　テリア　ぬいぐるみ	D_2 D_6 (>)	12	2	7	1
犬	D_5	2	1	0	0
魚　金魚	D_1 D_4	2	3	0	3
蝶	D_3	0	1	1	0
Obj　家具　椅子机	W	2	1	0	1
花びん　置物	W	1	3	2	2
Map　地図	W	1	0	1	1
Food　バーベキューの肉　クッキーキャンデー	W	1	2	1	0
Pl　花	W	0	3	0	4
Cl　雲	W	3	2	0	1
Arch　建物	S. WS	1	0	2	1
〃	d_1	1	0	3	0
門	W	0	1	0	0
Abst	W	0	1	0	2
その他		W 岩 W シャボテン D 顔 W 神社の縄 D 舞かんざし dd ネコの手	W 踊りのイメージ S 矢印 W ネックレス W 手 W 前衛画 D_3 こたつ D^4 長ぐつ W かぶと W あごひげ d_1 つの D_4 かけている人 W お祭のイルミネーション	D_3 大きい翼の人 D_3 扇子 D^1 木と2人の人 W くずれるもの S かぎ穴 W かぶと	SW スタンド W 飛ぶもの W 歯(2) W 耳の骨 S 石どうろう D_5 木の人形 D_4 長ぐつ D^1 柔道 D_4 アイススケート D_1 へびの頭 W 信号の色 d_2 リスのしっぽ W ジャム D_1 オタマジャクシ WS 下等 動物

そのものは明瞭に描き出してあるのでより強い刺激である色彩の方へ注意が大きくひかれたためと考へられる。このカードでは H. A. 群と L. A. 群が最も大きな差異を示している。このように明瞭に分割された色彩は H. A. 群を充分動揺させる刺激となるということができる。Table 5. から反応内容をみるとSシリーズ群とCシリーズ群に大きな差があると思われる。Cシリーズ群でP反応が減少し，〝魚〟〝金魚〟の反応が増大し，〝建物〟が減少し，〝花〟〝置物〟など装飾的なものが増加している。特に H. A. 群での反応レベルの低下は著しい。P反応の減少と良形態反応の減少は色彩が非常に大きな影響を与えたことを示している。

IV. 総　　括

従来色彩刺激は外在的情動刺激が被験者の情緒面に働きかけるものであり，又情緒的に不安定な人程その影響を受けやすいと考えられてきた。過去の研究がSシリーズで色彩効果の表出と思われていたものが無彩色シリーズでは減少するであろうという考え方に基づくものがほとんどであったので，ここでは逆にすべて色彩を含んだシリーズを作製すれば色彩効果の指標となるものがSシリーズに比べてより多く出現するであろうと考えてこの実験を計画した。結果はこのような解釈を実証的に確認するものではなかった。平均値の比較ではかなり肯定的な方向へと変化を見せていたが個人差が大きいため統計的有意差は認められなかった。この点は被験者の数を充分に大きくすれば解決されるかもしれない。但し H. A. 群で FM と H% が有意に変化を見せたのは注目に値する。また H. A. 群は Ⅶ カードのCシリーズ群で明らかに反応様式の混乱を示している。これらの点から不安が高く情緒的に動揺しやすい人程，色彩によって動揺しやすいということは云えるであろう。この点神経症者を対象として同様の実験を試みれば不安と色彩刺激との対応についてより明瞭な所見を得られるのではないか。

色彩刺激の作製については全く新しい試みであるので参考文献もなく困難なことが多かったが，その過程については前述のとおりである。これらの着色の効果については疑問がある。何故なら I. IV. V. カードについては被験者の多くが色彩と感じていないと報告しているからであり，また Ⅵ カードの出現で「まあきれい」「これはきれいだ」というような言語反応があるからである。つまり I. IV. V. のカードについてはもっと異った色をつければより顕著な変化があったかもしれない。Ⅵカードについてはシリーズの Ⅵ カードでD或いは d 領域として区切られていない濃淡の部分を切って着色したのであるがこの区分が充分に反応領域に意味をもたらさなかった。Sシリーズと同様の反応がほとんど同じ程度に出た他に CF のような色彩の印象を訴える反応がわずかに増加したのみであった。これは色によって区分した領域の輪郭が形態として何かの表象を想起させにくいものであったためと思われる。Ⅶカードはもともと明確に分割できる刺激であったので緑・黄・赤という色をつけた。このカードでは再三述べてきたが H. A. 群で著しく統合的困難を生じて反応がかなり乱れ形態水準の低い，個人的で独りよがりの反応が増大している。一方，L. A. 群では，あまり統制力を失わず適応していけるという明白な差異を見せた。従って Ⅶ カード程度の色をつけた時に初めて色彩刺激の影響が直接的に反応形態の中に反映され刺激と反応との関連が明瞭に捉えられる。このⅦカードでみられた事実は色彩の解釈仮説を支持する有力な手掛りとなるであろう。

また被験者に関しては H. A. 群といっても一応問題なく学生生活を過している広義の社会適応者であり精神疾患という面からみても症状を持たない正常者である。本研究所見の中で H. A. 群は不安，動揺，退行などを示唆する現象と防衛力，不安への反発力の強さ，ねばり強さを示唆する現象とを共に示し，これはこれなりに興味深いものであった。しかしより強い不安を有する精神疾患者などを H. A. 群として設定した方が L. A. 群との対比は鮮明となり統計的処理も容易だったのではないかと思われる。

引　用　文　献

Allen, R. M., Manne, S. H., and Stiff, M. 1951 The role of color in Rorschach's test: A preliminary normative report on a college student population. *J. proj. Tech.*, 15, 235-242.

Baughman, E. E. 1954. A comparative analysis of Rorschach forms with altered stimulus characteristics. *J. Proj. Tech.*, **14**, 151-164.

Brody, G. G. 1953. A study of the effects of colour on Rorsceach response. *Genet. Psychol. Monogr.*, 48, 261-311.

Crumpton, E. 1956. The influence of color on the Rorschach test. *J. Proj. Tech.*, **20**, 150-158.

Dubrovner, R. J., Lacknm, W. J. V., and Jost, H. 1951. A study of the effect of color on productivity and reaction time in the Rorschach test. *J. clin. Psychol.*, 6, 331-336.

Hafner, A. J. 1958. Response time and Rorschach behavior. *J. clin. Psychol.*, **14**, 154-155.

Lazarus, R. S. 1948. An experimental analysis of the influence of color on the protocol of the Rorschach test. *J. Personal.*, **17**, 182-185.

Lazarus, R. S., and Oldfeld, M. 1955. Rorschach responses and the influence of color. *J. Personal.*, 23, 356-372.

Meyer, B. T. 1951. An investigation of color shock in the Rorschach test. *J. clin. Psychol.*, 7, 367-370.

Rorschach, H. 1921. Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines Wahrnehmungs-diagnostischen Experiments. Hans Huber.

Siipola, E. M. 1950. The influence of color on reaction to ink-blots. *J. Personal.*, 18, 358-382.

Siipola, E. M., and Taylor, V. 1952. Reactions to ink-blots under free and pressure conditions. *J. Personal.*, 21, 22-47.

York, R. H. 1951. The effect of color in the Rorschach test and in selected intellectual task. Unpublished.